

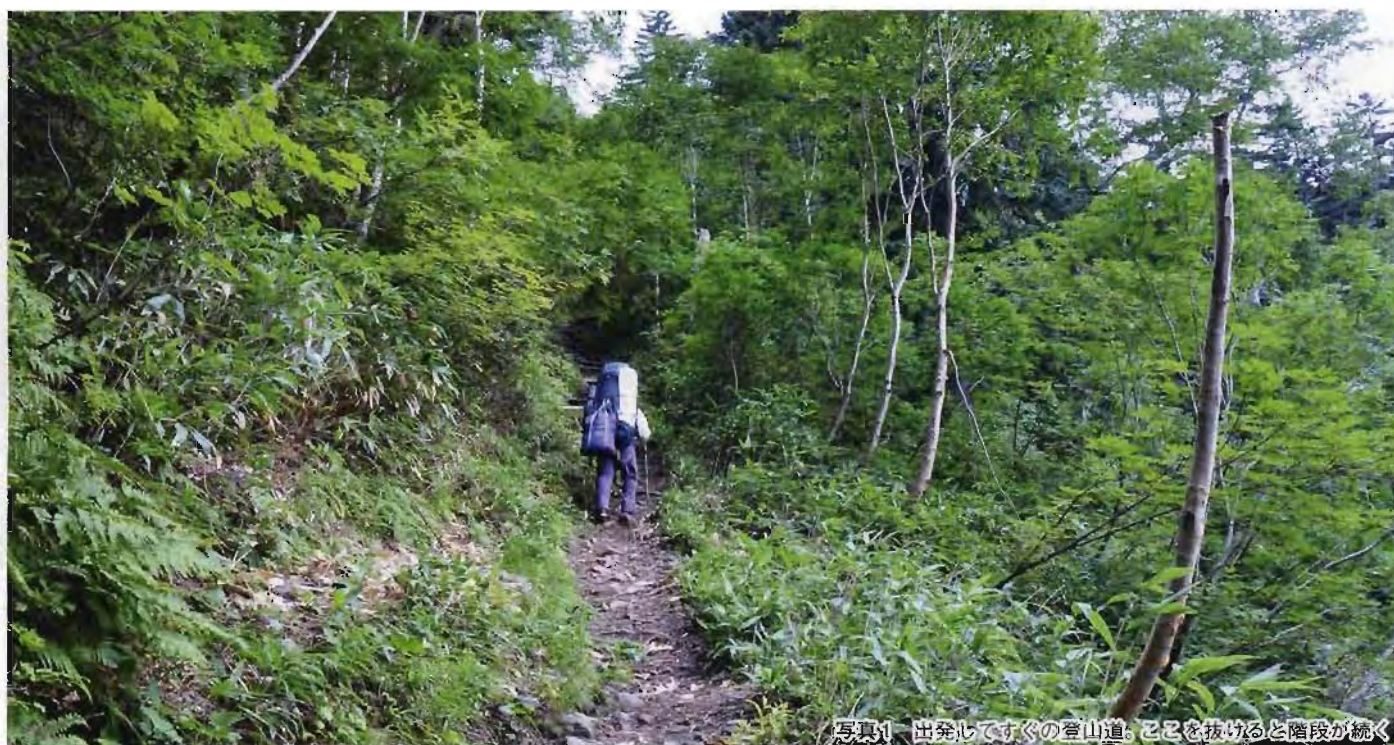


写真1 出発してすぐの登山道。ここを抜けると階段が続く

きっかけは大雪山

なが い ま ゆ か
永井麻由佳

私は神奈川県横須賀市で育った。生まれて初めて登った山は大楠山だった。標高は300mにも満たないが、三浦半島では最高峰であり、頂上からは半島を囲む海が一望できた。小学校の行事で毎年登っており、その景色は今でも目に浮かべることが出来る。しかし、当時から大学に至るまで、私の興味は山よりも海にあった。

高校の地理の授業が楽しかったから、という単純な理由で大学では地理を専攻した。一年生の講義で地形に関心を持ってから、卒業論文は海岸地形の研究をしよう、とずっと考えていた。

しかし、大学三年生の夏をきっかけに、“山”というものに対する考えが大きく変化した。それは大学生のもっと早い段階、時間のあるうちに、もっと早く山に登っていればよかった、と後悔するほどの体験だった。私はすっかり山の魅力にとりつかれて、どうしても山をフィールドにして卒業論文を書きたくなった。それまで海岸地形を研究するつもりで文献を読んできたが、テーマを変えてからは山岳地形につい

ての資料を読み漁り、卒業論文では長野県の鉢伏山で構造土の研究をした。

今回この記事を執筆するにあたり、卒業論文の研究について書くことも一度は考えた。しかし、少しでも登山に興味を持つ人が増えてほしい、という思いから、ここでは私は山に興味を持つきっかけとなった大雪山登山について主に書いていくことにする。

大学三年生の時に履修していたある講義で、もし興味がある学生がいたら北海道の白雲岳で行う合同調査に同行しないか、という話があった。講義担当の長谷川裕彦先生は山岳地形、中でも氷河地形を主に研究しており、登山経験も多く、講義の中でもよく登山の話をしていて。私と友人は、講義の内容も興味が持てるし、現地調査も楽しそうだ、という好奇心から、調査に参加することにした。実のところ、二人とも北海道に行ったことがなく大学生のうちに行ってみたかった、ということもある。

しかし、当時は二人とも山岳地形についてはあまり知識がなく、そこがど

のくらいの規模の山なのか想像がつかなかった。指定された大きさのザックや登山用のウェア、靴を購入して、ようやく高い山に登る実感が湧いたほどである。

北海道で先生方と合流した翌日の8月17日、出発地点である大雪山高原温泉に到着した(図1、地点A)。荷物が入り膨れたザックを背負った瞬間、これまでに体験したことがない重さに驚いた。これを背負って山に登るのか、と不安になったが、腰のベルトをしっかり締めると少し楽になった。

全員の支度が整い、登山口に向けて歩き始める。まだザックの重さに慣れないうちに、森の中へ続いていく急な階段が目に入った(写真1)。ひっくり返らないように、慎重に登っていく。木が影を作っているため最初は涼しかったが、徐々に暑くなってきた。普段あまり運動をしないせいで、息切れが早かった。しかし、私は前から二番目を歩いていたため、止まるわけにはいかなかった。気合いのみでひたすら階段を登っていると、先が明るくなっ

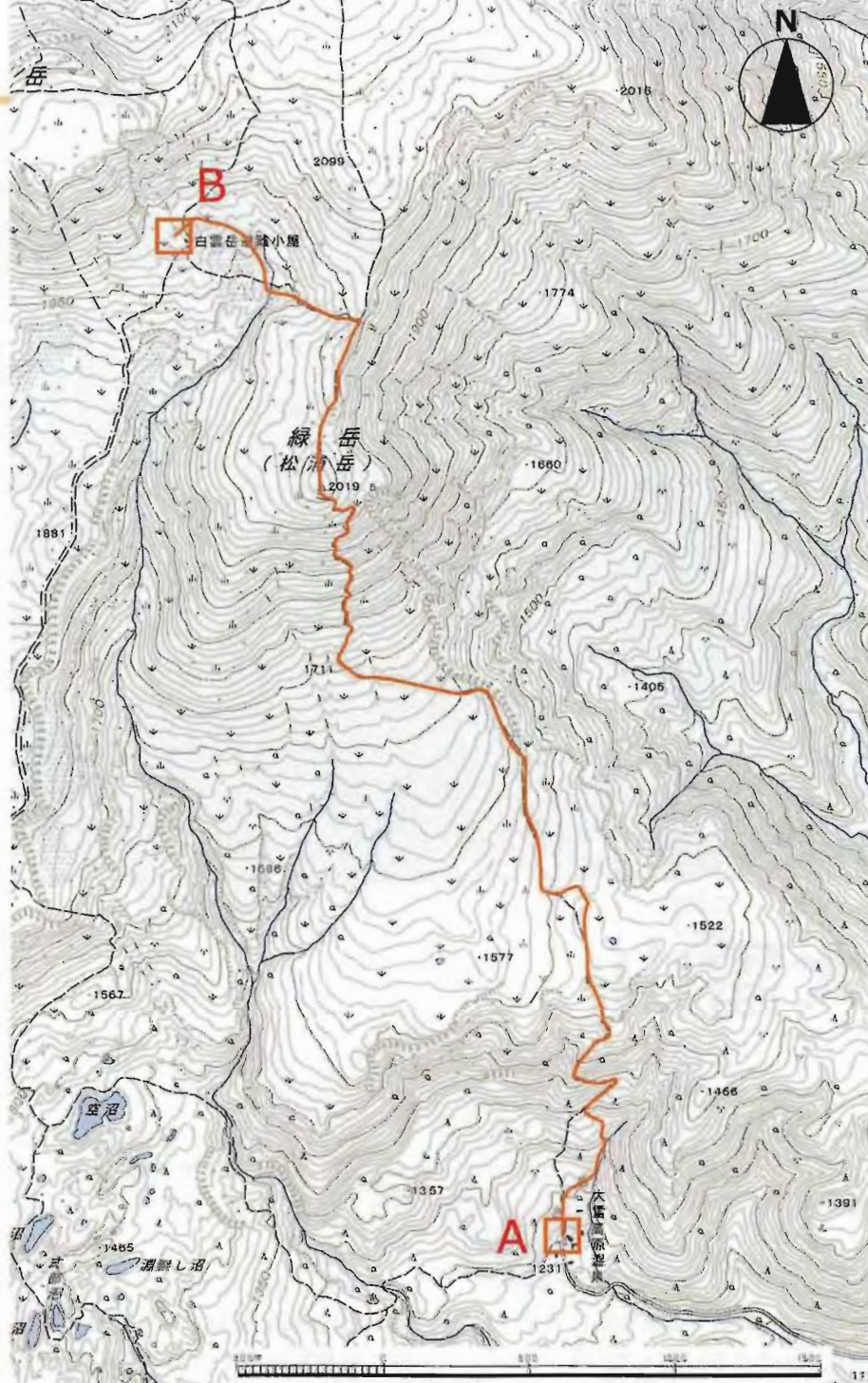


図1 大雪山登山ルート。地点Aの大雪山高原温泉から入山。調査は地点Bの白雲岳避難小屋そばのテント場を拠点とした。ベースマップは1:25,000地形図「白雲岳」を使用(平成19年更新)

写真2 標高1,500~1,700mの緩やかな道。進んでいくうちにチングルマやコマクサ、コケモモなど、亜高山帯~高山帯の植物が現れ始める。



写真3 緑岳の斜面を登る。岩塊斜面が始まってから緑が減り、岩の隙間に生えたハイマツが目立つように分布し、強風や気温などが厳しい環境になる冬を越す。

ているのが見えた。やっと階段が終わる、と安堵する。

木に囲まれた階段を登りきると、草原の中に木の板が敷かれた道が緩やかに続いていた。呼吸を整えつつ、のどかな景色を眺めながら歩いた(写真2)。時折、先頭を歩いている先生からそこに生えている植物について教えていただいた。前方に高い山が見えていて、「これからあのくらいの高さまで行くのか。あそこには何があるのだろう」と楽しみに思えてきた。

しばらく平坦な道が続いたが、だんだんと周りの景色が変わってきた。崖が見えるようになり、気が付かないうちにずいぶん高いところまで登ってきたことに気が付く。遠くからはほぼ垂直に感じられる、3mほどの高まりが見えた。張られたロープを掴んでよじ登った時、しばらく気にしていなかった荷物の重さを改めて感じた。

この時には、高い樹木は周りにはほとんど見られなくなっていた。ハイマツの中をさらに登っていくと、小さいものでも1辺50cm以上はある大きな岩が斜面を覆っていた(写真3)。登山ルートはその斜面を登るように示されている。私がこれまでイメージしていたような登山道とはかけ離れた景色に戸惑うが、慣れたようにそこへ向かっていく先生に続き、斜面を登り始める。しばらく登ったところで下方を見





頂上までは約250mの標高差がある。このあたりからなる。大雪山のハイマツは一定の積雪のあるところに

下ろす。蛇行するようなルートに従って登っていたため、急傾斜に気が付かなかった。大きな岩に手を付きながら進んでいくうちに、徐々に視界が曇り始め、風が強くなっていく。斜面を登りきり、緑岳の頂上に着いた頃には、周囲は真っ白でふらつくほどの強風が吹いていた。重い荷物を背負っているのにもかかわらず、背で風を受けると前に倒されてしまいそうになる。そこで少し休憩を取ったが、風があまりにも強く休んでいる気がしなかった。

テント場である白雲岳避難小屋の傍に向かって再び歩き始める。少し下ったところで、歩いて行く先が氷で覆われているのが見えた。氷は固く、足を

滑らせて転んだら相当痛いことは予想できたので、それまでの道のりの中で最も慎重に歩いた。

氷の道を越え、ハイマツをかき分けて登り、避難小屋に着いたところで、これから調査の拠点とするテント場が見えた(図1、地点B)。目的地に到着したことを知った時、長く感じたそれまでの道のりが思い出された。そして改めて周りの景色を眺める。どこまでも続いている山々も、高い樹木のない丘も、一年中残っている雪も、全て初めて見るものだった。それを見て感動しているうちに、達成感と喜びが心の底から沸々と湧いてきた。自分の足で登ってきたからこそ見ることが出来たのだ、と思うと更に嬉しくなる。曇っていなければもっといい景色だったに違いない。その点だけ少し残念に思いながら、テントを張りに行く。夕食を取った後、翌日からの調査に備えて早めに就寝した。

翌日、寒さで目を覚ました。時計を見るとまだ4時頃だった。体を丸めて暖を取り、先生方が起きるのを待った。外が明るくなってきた頃にテントを出た。前日の雲は既に消えており、真っ青な空に細い雲がところどころ浮かんでいた。目の前に迫る白雲岳を眺めると、日を受けた雪がとても眩しかった(写真4)。空気も澄んでおり、テント場の西側に遠くまで続く山脈を眺めることが出来た。ここに来て良



写真4 テント場に迫る白雲岳の斜面。白雲岳避難小屋の標高は約2,000m。ここにたどり着くまでに歩いてきた氷の上も含め、周囲にはこのような永久凍土が多くみられる。これに関連して、平ヶ岳(図2)の南の湿原には、永久凍土による地形であるバルサが形成されている。

かった、と心から思えたのはこの時だった。

朝食を取った後、調査のため南西の平ヶ丘方面へ向かった(図2)。この日は重い荷物を持っていない分、周りを眺める余裕が十分にあった。大楠山しか知らなかった私にとっては、山の上にこんなに広い場所があることが信じられなかった(写真5、6)。歩いているだけで清々しい気分になった。時々、先生方が足を止める。「あの地形は…」と斜面を指さして、相談している。ところどころ聞こえてくる用語の意味は分かって、それがどこを指しているのかはよくわからない。ほぼ何も勉強せずにここまで来た自分が恥ずかしくなった。

先生方に地形や地質、植物など、様々なことを教わり、尋ねながら、調査は2日、3日と続いた。初めて見るものばかりで、何もかもが新鮮だった。中でも一番印象に残ったのは、凍結と融解を繰り返して形成される構造土という微地形だ(写真7)。これが後に、卒業論文のテーマを決定することになるとは、この時はまだ思っていなかった。

毎日楽しみだったことは調査だけではない。日中は涼しく歩いていて気持ち



写真5 白雲岳避難小屋のテントを出て、南方の高根ヶ原方面へ向かう。背の高い樹木はほとんどみられず、強風で一定方向へ傾いたハイマツと露出した礫が目立つ。標高約1,800mの平坦な道が続く。礫の部分には条線土、多角形土がみられるところが多い

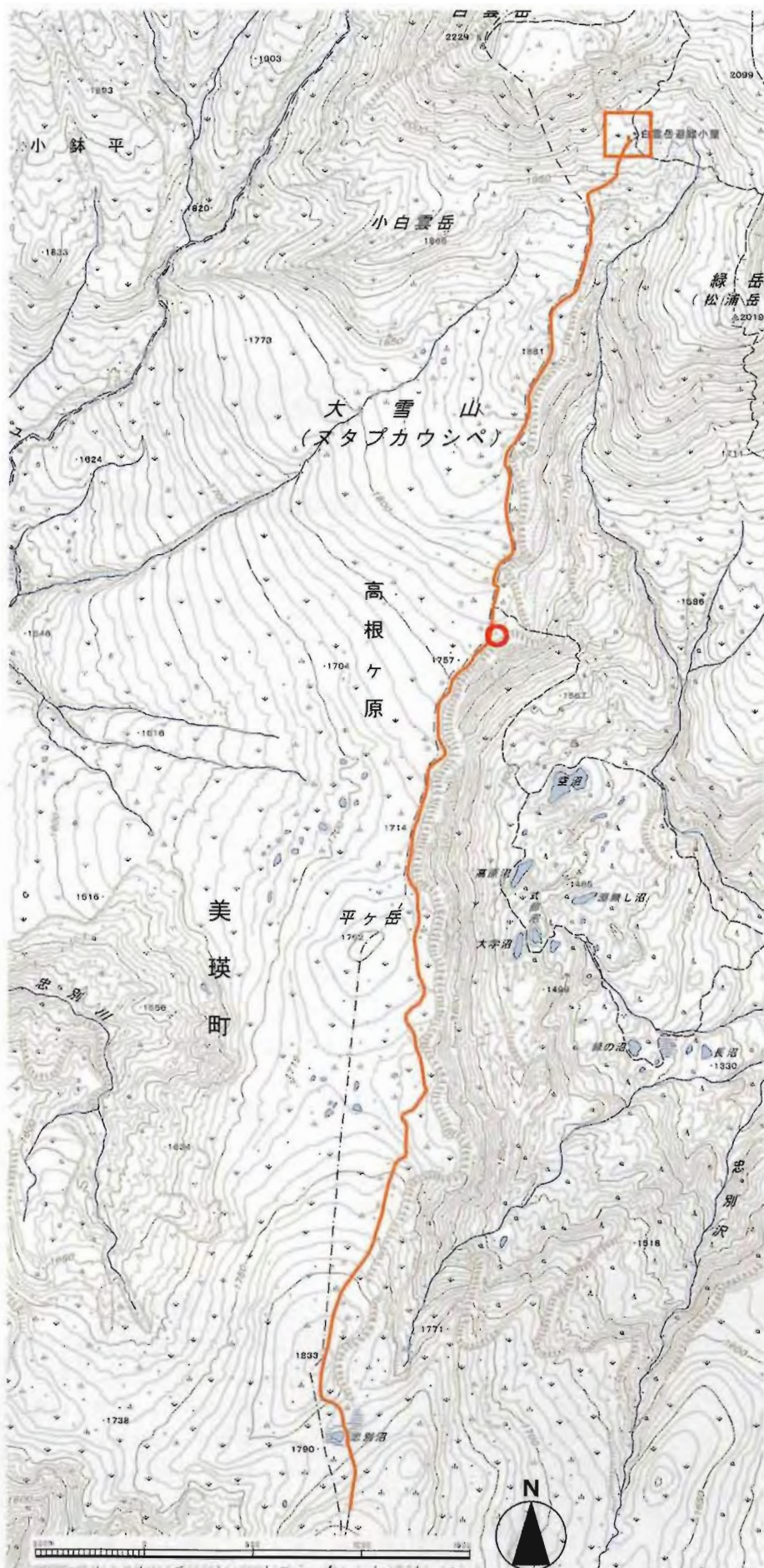


図2 調査で主に歩いたルート。図には記していないが白雲岳にも登頂した。写真6は図中の○印の地点。ベースマップは1:25,000地形図「白雲岳」を使用(平成19年更新)



写真6 図2、○印の地点より南方向を見た風景。急崖歩いていた高原と比較すると、この斜面には緑が多く

ちが良いが、朝と夜は冬のように寒かった。そんな体が冷えている時の温かい食事や飲み物がとにかく幸せだった。この時ほどインスタントラーメンの美味しさに感動したことはなかった。

8月21日、下山の日がやってきた。この頃には「このままずっとここにいたい」と思うようになっていた。もうこの景色をしばらく見られないのかと思うと気落ちした。食糧が減った分、少し軽くなったザックを背負う。調査の間に見た景色を思い浮かべながらの帰り道はあっという間に感じられた。行きに教わった花に気付いて、帰ってきたことを実感してしまい寂しくなる。森の中の階段を下っていくうちに、ひんやりとしていた空気が温くなっていく。森を抜けると先生の車が見えて、無事に下山できたことに一応は安心した。

その日は石狩川のそばでキャンプをして、翌日に先生方と別れた。その夜、初めて筋肉痛になり、登山は登りよりも下りが大変だということを初めて知った。

地元に戻ってからも、山で見た風景が忘れられず、数日の間余韻に浸っていた。そしていつか再び大雪山に登ることを誓うと共に、もっといろいろな山の景色を見てみたい、と思うようになっていた。



となっている東向き斜面には残雪が多くみられる。印象的だった



写真7 構造土は、凍結で鉛直方向に持ち上がった砂礫が、融解時に斜面の状況や礫の大きさなどによって移動の仕方に違いが生じることによって形成される地形。地表面に幾何学模様が現れるのが特徴で、寒冷な場所によくみられる。写真は緩斜面に形成された植被階状土。植生株の面が削れていることや、淘汰された砂礫の様子から、この場所では写真手前右側から写真奥に向かって風が吹くことも予想できる

しかし、大学三年生の秋にはゼミの実習、それを終えると卒業論文が始まり、趣味で登山をする十分な時間はなかった。それでも山に行きたい、と思い、卒業論文のフィールドを山へ変更することを考えた。そして、研究テーマには大雪山で最も興味を持った構造土を選び、構造土に関連する地形についての文献を探し始めた。

最も悩んだのは調査地域の選定だ。卒業論文の調査を大雪山で行うことも考えたが、翌年の一度の調査に賭けるのは不安だった。そのため、構造土が形成されており、アクセスが良く何度も研究に行くことが出来る、という条件を満たす山として、長野県の鉢伏山を調査地域に選んだ。大雪山に同行した友人は、同じく長野県の霧ヶ峰を調査地域に選定したため、調査は二人で行った。

いずれも山頂付近まで車で行くことが出来る山のため、現地を歩くことは登山というよりはハイキングに近い。しかし、山頂からの景色は大雪山とはまた異なる良さがあつた。鉢伏山からは諏訪湖が眺められたし、霧ヶ峰の車山からは歩いてきた道や湿原が見られる。

大雪山登山との大きな違いは、自分たちで地形を観察し、記録して歩くことだった。初めて現地に行った時は、その地形が構造土か否かを判断するこ

とが難しく、その度に文献を読み直した。繰り返し現地調査と事前の勉強・予測を重ねていくうちに、地形図を見て頭の中で地形をイメージすることができるようになっていった。この経験のおかげで、今では行ったことがない場所の地形図からもおおまかな地形を想像できる。

また、山における楽しみは調査ばかりではなかった。その中の一つが現地で遭遇する動物だ。大雪山ではナキウサギをテント場のそばで見ることができたし、先生方は崖の下をヒグマが歩いているのを見たという。鉢伏山では鹿に遭遇することが多かった。9月に入るとほぼ毎回鹿を目撃するようになり、親子で歩いている様子がよくみられた。霧ヶ峰では夕方に道路脇に数匹並んでいたこともある。神奈川、千葉に住んでいる私たちにとっては野生の

鹿を見る機会がほとんどないためとても新鮮だった。

卒業論文を終えてからは、また大雪山に登りたいと思う気持ちが更に強くなった。研究を経て、先生方に教わるばかりだった当時よりは知識を身に付けたつもりではあるし、何より現地調査の楽しさを知ったことが大きい。何より、自分の足で登りきった、という感動をもう一度味わいたくなったからだ。大雪山の他にも、興味があり登ってみたいと思う山はたくさんある。今のところは乗鞍岳や白馬岳といった、構造土や非対称山稜など特殊な地形がみられる山に登ってみたいと考えている。また、山好きとして一度は富士山に登っておくべきか、と思っはいるが、今のところそれ以上に魅力を感じる山が多いので、しばらく先になりそうだ。

永井麻由佳

昨年、国士舘大学の地理・環境専攻を卒業。大学では主に地形学を学ぶ。好きなものは地図・旅行・バイク。現在は次回の地図地理検定に向けて勉強中。



写真中央が筆者